

第八回 元直馬を走らせて諸葛を薦む、劉玄德三たび草廬を顧みる

— 三顧の礼 (一) —

今回はいよいよ、『三国志演義』きつてのスーパースター、諸葛亮（孔明）が登場します。劉備と諸葛亮の「三顧の礼」は、荊州を舞台に展開します。荊州は地図で見ると長江の流に位置します。北の黄河流域に比べると、気候も温暖で自然環境にも恵まれています。多くの詩人が長江流域の恵まれた自然を謳いあげています。たとえば李白の「洞庭に遊ぶ」は、洞庭西に望めば 楚江分かる

水尽きて南天 雲を見ず

日落ちて長沙 秋色遠し

知らず何れの処にか 湘君を弔わん

広大な湖、悠々と流れる長江の光景を謳います。

この地に北方の戦乱を避け、多くの人士が移り住みます。司馬徽と徐庶はいずれも潁川郡の人で、戦乱の中原地方から荊州に移り住んだ人です。諸葛亮（孔明）、崔州平、石韜、孟建

も同様です。これらの人は学問の師弟（しい）また同友としてつながっていました。

(本文抄)

劉備は徐庶と別れるに忍びず、次の亭まで見送り、さらにまたその次の亭まで見送った。

徐庶が別れを告げて言った。

「これ以上遠くまで見送っていたたくわけにはいきません。ここでお別れいたします」

劉備は徐庶の手を握り、「先生とここでお別れすれば、いつまたお目にかかれるかわかりません」と言って涙を流した。

徐庶もまた泣きながら別れて行った。

すると、ふいに徐庶が馬を蹴（けた）立ててもどつて来るのが見えた。劉備は言った。

「元直がもどつて来た。思い直したのだろうか」

劉備は喜び勇んで、「先生がこうしてお帰りくださったのは、きつとお考えがあつてのことでしょう」と。

徐庶は劉備に言った。

「私は心が乱れていたために、大事な事を言い忘れていました。この地に一人の優秀な人材

がおり、襄陽城から二十里離れた隆りゅうちゆう中に住んでいます。ぜひとも彼をお訪ねください」

「お手数だが、その人を連れて来てもらえないだろうか」と劉備。

「この人は呼ばれて来るような方ではありません。使君みずからお訪ねください。もしこの人を得ることができれば、周の文王が太公望たいこうぼう呂尚りょじやうを得、前漢の高祖こうそが張良ちやうりやうを得たのと変わりません」と徐庶。

「その人の才能は先生と比べてどうですか」と劉備。

「私と彼を比べるのは、駑馬とばと麒麟きりんを並べ、カラスと鳳凰ほうおうを比べるようなものです。彼はつねづね自分を管仲かんちゆう・樂毅がっきになぞらえておりますが、管仲・樂毅も彼にはおよばないほどです。彼には天下を動かす才能があり、当代、彼の右にでる者はありません」と徐庶。

「その人の姓名を聞かせてもらいたい」と、劉備は大喜びして言った。

「その人は琅邪郡陽都ろうやぐんやうとの出身で、姓は諸葛、名は亮、あざな孔明しよかっけいといい、父の諸葛珪しよかっげんは泰山郡の丞（副官）をしておりましたが、早く亡くなりましたので、諸葛亮は叔父の諸葛玄しよかっげんに育てられました。諸葛玄は州の劉表と旧知の間柄だったので、彼のもとに身を寄せ、襄陽に住むようになったのです。

その後、諸葛玄が死去すると、諸葛亮は弟の諸葛均しよかっくんとともに南陽でみずから農耕にたずさ

わるようになりまして。彼はいつも好んで『梁父吟』りやうほぎんを歌い、住んでいる土地に臥龍岡がりようこうと呼ばれる岡があるので、みずから臥龍先生と号しております。この人こそ世にも稀まれな天才です。急いで会いに行かれるべきです。彼が輔佐を引き受けてくれたならば、やすやすと天下を治めることができます」と徐庶。

「かつて、水鏡先生（司馬徽）は、『伏龍と鳳雛の二人のうち、一人でも得られたならば、天下を治めることができる』と言われた。今、言われた人こそ伏龍・鳳雛ではありませんか」と劉備。

「鳳雛は襄陽の龐統ほうとうであり、伏龍はまさしく諸葛孔明です」と徐庶。

劉備は躍り上おどがって言った。

「今、はじめて伏龍・鳳雛が誰だかわかりました。すぐ近くにおられるとは、思いもよりませんでした。先生に教えていただかなければ、私は目があつても見つけだせなかつたでしょう」

（解説）

徐庶は劉備に伏龍・鳳雛が、諸葛孔明と龐統ほうとうであると教えます。そして諸葛孔明は呼びよ

せるのではなく、自ら訪問しなければなりませんと言います。そして諸葛孔明の才能は、かの管仲・楽毅も及びませんといっています。

これまで劉備には関羽・張飛など「万人の敵」と称された猛将はいましたが、全体を俯瞰してグランドデザインを描くことのできる軍師がいませんでした。司馬徽が劉備に軍師の必要性を説き、徐庶がその役割を果たすかと思つた矢先、徐庶は曹操のもとに行つてしまいます。徐庶から諸葛孔明にバトンタッチです。

諸葛亮（孔明）が自らをなぞらえた管仲と楽毅とは、

昔高校の漢文で学んだ「倉廩満ちて礼節を知り、衣食足りて榮辱を知る」、これは管仲の言葉です。春秋時代の覇者、斉の桓公の名宰相で、まず経済の安定を重要視しました。衣食住が満たされて誇りと恥じを知ることができると。また、「一年の計は、穀を樹るに如くは莫し、十年の計は、木を樹るに如くは莫し、終身の計は、人を樹るに如くは莫し」とも。つまり、一年の計画なら穀物を植えればいい。十年の計画なら樹を植えたらいい。永遠の将来を見据えるのなら人材を育成するしかない、と述べています。

後に諸葛亮も、何度も魏への北伐の軍を起こしますが、莫大な軍事費が民衆の生活を圧迫しないように細心の注意を払っていました。また、人材の登用に努めたところなども、目標

とした管仲に通じるところです。

また真の友情を意味する故事「管鮑かんぼうの交わり」は、管仲と親友鮑叔牙ほうしゆくがの友情をもとにしたもので、唐代の詩人杜甫とほは、その詩「貧交行ひんこうこう」で「君見きみずや管鮑貧時ひんじの交わり、この道いまの人捨ひとてて土のごとし」とうたっています。経済を安定することの大切さ、人材を育成することの大切さ、友との信義を重んじることの大切さ。これらのことを、管仲は心の中心においていたのでしょうか。

樂毅は戦国時代の燕えんの將軍です。当時燕は小国でしたが、周辺諸国を圧迫した最強国の斉を滅亡寸前まで追い込んだ名將軍です。

諸葛孔明は有能な政治家は言うに及ばず、有能な軍事指揮官も目指していたのです。

また上の本文抄に「彼はいつも好んで『梁父吟りょうふほぎん』を歌った」とありますが、『三国志』諸葛亮伝にも、「好んで『梁父吟』を歌ってくらしした。身長は八尺もあり、つねに自分を管仲・樂毅ぎに擬ぎしていた」とあります。

では、諸葛亮が好んだ「梁父吟」とは、どんな内容なのでしょう。

「梁父吟」は「晏子春秋」に出てくる「二桃三士」の逸話を主題にしています。

斉の景公は、武勇をもつて知られた公孫捷・田開疆・古冶子の三人を召し抱えていました。三人は、宰相である晏嬰が前を通つても立ち上がらないなど傲慢な態度をとります。晏嬰は、のちのち三人が斉の脅威になることを恐れ、三人の間の離間を図ります。

晏嬰は景公に進言します。

「公孫捷・田開疆・古冶子の三名は優れた人物ではあるけれども、将来国に危険をもたらす者達です。三人は真つ向から挑んでも勝てるものではなく、策略をもつて討ち取ることが大事です」と。

晏嬰は、景公からの「三子、功を計つて食え」との言葉を添えて、二つの桃を送ります。功績の多い者が桃を取れ、というのです。しかし、三人に対して二つの桃。

三人は桃をとるために自分の功績をあげはじめます。

公孫捷、「俺は虎の子をうち殺したことがある」

田開疆、「俺は二度にわたつて敵の大軍を破ったことがある」

といつて、先に二つの桃をとります。

すると古治子が、「かつて主君が黄河を渡られた時に、巨大な大亀が馬車のそえ馬をくわえて河の中へ引きずりこんだことがあった。その時俺は水中に飛び込み、ついに大亀を捕らえて殺した」と語ります。

それを聞いた公孫捷と田開疆は自分たちが古治子の功績に及ばないことを悟り、先に桃を取ったことを恥じて自殺します。古治子も、一つの桃を二人に半分ずつ与え、私が一つを貰うということもできた、人に恥をかかせたことを不義とし、あとを追って自殺します。

これにより晏嬰は何の手も下さずに、三名を死に追いやったのでした。

諸葛亮が自ら目標にしたのが管仲と楽毅、そして好んで歌ったのがこの「梁父吟」でした。のちに関羽が荊州で敗死したとき、劉備の養子劉封は関羽を救援しなかったことを責められ、自殺を命じられます。劉封は「武芸有り、氣力人に過ぐ」という逸材でしたが、『三国志』に次のように記述します。

この時、「諸葛亮、（劉）封の剛猛にして、世易わるの後、終に制御し難きを慮り、先主に勧めて此れに因りて之を除かんことを要む、是に封に死を賜い、自裁せしむ」という行動に出たのです。

関羽が死んだあと、蜀は何よりも人材を必要とするときに、「武芸有り、気力人に過ぐ」といわれた劉封を自殺させてしまうなど、してはならないことと思えますが、劉備の後継ぎの劉禪は「闇弱あんじやくにして晴陰せいけんの性無せいし」と評される頼りない人物なので、後々のお家騒動の芽を今の内に摘み取っておこうとしたのです。まさにこの「梁父吟」を地で行くような話です。一方徐庶のほうですが、このあと母に出会い、手紙が偽物にせものであることを知ります。そして、憤激した徐庶の母は自ら首をくくって死んでしまいます。

かつて漢楚かんその攻防の際、沛ばいの豪族・王陵おうりょうは漢の劉邦の軍に加わります。

そこで項羽は王陵の母をとらえて、王陵を味方につけようとはかります。しかし王陵の母は、王陵にあなたが心残りのないよう私は自害します、と手紙を書き送り、みずから頭を砕いてしまいます（『漢書』王陵伝）。

徐庶の母が自殺するのはフィクションですが、この王陵の母をモデルにしたと思われる。現在の感覚からは極端な話ですが、徐庶の母の毅然きぜんとした強さを描きます。

そして徐庶は、この事で曹操のために献策はしないという誓いを立てます。彼は、後の「赤壁の戦い」でまた登場します。

(本文抄)

翌日、劉備は関羽・張飛とともに、隆中にやって来た。

はるか向こうの山の麓で、数人の農夫が畑を耕しながら、歌を歌っている。

これを聞いた劉備は馬をとめて、農夫にたずねた。

「臥龍先生のお住まいはどちらかな」と劉備。

「この山の南にずっと連なる岡が、臥龍岡がりようこうです。その手前の林のなかに、草葺きの家があり

まして、それが諸葛先生のお住まいでございませう」と農夫。

劉備は農夫に礼を言い、先を急いだ。数里も行かないうち、臥龍岡が見えて来た。

劉備は家の門前で、馬から下りてみずから柴の戸を叩くと、一人の少年が出て来て、誰

かとたずねるので、劉備は言った。

「漢の左將軍・宜城亭侯・領豫州牧、皇叔の劉備が、先生にお目にかかりに来ました」

「そんな長い名前は覚えられないよ」と少年。

「それでは劉備が訪ねて来たと、お伝えください」と劉備。

「先生は今朝早くお出かけになったよ」と少年。

「どこへ行かれたのかな」と劉備。

「行く先は決まってるから、どこへ行かれたかわかりません」と少年。

「いつお帰りかな」と劉備。

「それも決まっています。三、四日のこともあれば十数日のこともあります」と少年。

劉備がしきりに残念がつていると、「会えないのなら、帰ったほうがいい」と張飛。

劉備は「もうしばらく待ってみよう」と言ったが、関羽も「いったん帰り、人をやって確かめさせてから出直したほうがいいでしょう」と言う。

劉備はこれに同意して、「先生がお帰りになったら、劉備が訪ねてきたと伝えてほしい」と少年にことづけた。

かくて馬に乗り、数里行ったところで、隆中の景色を眺めわたしていると、黒い布の上衣を身につけた人が、杖をつきながら山あいの小道からやって来た。

劉備は、慌てて馬から下りてお辞儀をしながらたずねた。

「もしま臥龍先生ではありますまいか」

「將軍はどなたですか」とその人。

「劉備でございます」と劉備。

「私は孔明ではありません。孔明の友人、博陵の崔州平さいしゅうへいです」とその人。

「お会いできて光榮です。しばらくここに腰を下ろしてお教えをうけたく存じます」と劉備。

「將軍は、どうして孔明にお会いになりたいのですか」と崔州平。

「現在、天下は大混乱し、四分五裂のありさま。孔明どのにお目にかかつて、国家を安定させる方策をお教えいただきたいのです」と劉備。

「あなたの天下の混乱を収めようとお考えは、仁徳あふれるものと思いますが、古から治と乱は交替こうたいするものです。光武帝（劉秀）が中興して今に至るまで二百年、長らく安定したため、またも戦争が各地で起こるようになりました。これぞまさしく治世から乱世へと移行する時代なのですから、すぐに安定させることはできません。將軍が孔明に天地の動きをもとに戻させようとなさっても、徒勞とらうに終わるでありましょう」と崔州平は笑いながら言った。

「先生のおっしゃることは、まことにごもつともです。しかし、私は漢王朝の末裔であり、傾いた漢王朝を助けなければなりません。どうして天運や天命に身を委ねることができませんか」と劉備。

「私は田舎者風情ふぜいで、とても天下を論じるような柄がらではありません。お尋ねいただいたので、ついつい妄言もうげんを申し上げました」と崔州平。

「お教えをいただきありがとうございます。それにしても孔明どのほどこへ行かれたのでし

ようか」と劉備。

「私もこれから訪ねようと思つていたのですが、どこへ行つたかわかりません」と崔州平。

「先生には私どものところにおいでいただけ shouldn't でしょうか」と劉備。

「私はぶらぶらしているのが性に合つております。功名を立てることなど忘れてしまいました。またいづれお目にかかることもあるでしょう」と言うと、崔州平は挨拶をして立ち去つた。

(解説)

まず「三顧の礼」の一回目の訪問です。諸葛亮の所在地について『三国志演義』では「襄陽城から二十里離れた隆中に住んでいます」とし、その少し後に「南陽でみずから農耕にたずさわるようになりました」とも書いています。

これは、『三国志』の諸葛亮の劉禪への上表文「出師の表」に「躬ら南陽に畊す」とある一方で、その注に「襄陽城の西二十里に在り、号して隆中と曰う」とあるのをもとに、『三国志演義』が書いたからです。

しかし、襄陽は現在の湖北省襄陽市、南陽は現在の河南省南陽市であり、二つの間の直線

距離は一一五キロもあります。

したがって、諸葛亮がどこに住んでいたのかについてこの二説があり、襄陽も南陽もうちこそが本家本元だといって譲りません。

しかし当時の南陽は、劉備が駐屯した対曹操の前線基地である新野よりもっと北にあり、当時は曹操の支配地域に含まれます。ですから劉備がそこへ三度も訪問したというのは無理があります。南の襄陽に軍配があるのではないかと思えます。

新野―隆中間はグーグルマップで表示しますと八十キロあります。徒歩で十六時間の表示がでます。途中、漢江かんこうなどの大河も渡らなければならず、しかも千八百年前の旅なので、騎馬であったとしても片道数日を要したことでしょう。ここからも、劉備の「臥龍」を求める熱意には相当のものがあつたことがわかります。

また、この劉備と諸葛孔明の出会いから、蜀建国の物語がはじまります。

劉備と諸葛孔明の出会いには、まさに蜀の建国物語の原点となつていったのでしよう。ですから「三顧の礼」には、象徴的数字である「三」が使われます。

また、『三国志』の注の「魏略」には「樊城はんじょうに屯していた劉備に諸葛亮が北行して会いに行つた」という記述があります。劉備が諸葛亮に会いに行つたのではなく、諸葛亮が劉備に

会いに行ったという真反対の記述です。

しかし、諸葛亮が北伐にあたり劉禪に奉った「前出師表」には、「先帝、臣の卑鄙（ひひ）なるをもつてせず、猥（みだ）りに自ら枉屈（おうくつ）し、三たび臣を草廬（そうろ）の中に顧み」とあるので、この説は否定されているのですが、蜀建国の物語にするためには、諸葛亮のほうから劉備に会いに行ったというのでは具合が悪いのでしょうか。劉備が三度も諸葛孔明のもとを訪れるという物語にしなければなりません。ですから実際は、『三国志』の本伝に「凡そ三度」とあるように、文字通り三回訪問したととらなくともいいように思います。

第一回目の訪問は諸葛孔明が留守のため出会えませんが、劉備は帰途、孔明の親友崔州平に出会います。崔州平は、世の流れを変えようとあくせく努力しても無駄なことだと劉備にいいますが、劉備は、漢王朝の末裔（まつえい）として世の中の流れに身をゆだねることはできませんといっています。

ここはおそらく、司馬遷『史記』の「孔子世家」の次の記述がもとになっているのでしよう。

隱者の桀溺（けつてき）が孔子の弟子子路（しろ）にいいます、「悠悠（ゆうゆう）たる者は、天下皆是（これ）なり。而るを誰をか

以て之を易かえん（世の中は悠々と流れていくのが天下の自然。それを誰が強制的に変えることはできるといふのか」と。

子路はそのまま孔子に告げると、孔子は「鳥獸は與ともに羣むれを同じうす可からず。天下に道みち有らば、丘きゅう（孔子の字の中なら、私だつて世の中を変えようとなんか努力しないよ」といいます。

さしずめ、桀溺が崔州平で、孔子が劉備といったところでは、劉備の志を『三国志演義』は崔州平との会話を通して描きます。

当時は四百年間続いた漢の治世ちせいがいよいよ終わり、群雄割拠ぐんゆうかくきよの戦乱、天災や飢饉が相次ぐ時代です。支配階層といえども激しい浮沈ふちんにさらされ、悲惨な人生を送った人も多かつたでしょう。しかしそれ以上に、歴史に記されない庶民とたんの塗炭とたんの苦しみは、言語に絶するものがあたはずです。

まさに、土井晩翠「星落秋風五丈原」の世界です。

四海の波瀾収はらんまらで 民は苦み天は泣き

いつかは見なん太平の 心のだけき春の夢

群雄立ちてことごとく 中原鹿しかを争ふも

たれか王者の師を学ぶ

丞相病篤やまいあつかりき

乱世に際しての崔州平と劉備の対照的な生き方です。乱世に世を捨てて隱遁の生活に入るか、あえて人々を救済しようと願うか。

激しい時代の波は、人を飲み込こんでしまう一方、人間の素質を磨みがく役割もします。時代が人を作り上げていきます。劉備も平穩な時代に生まれ合わせたら、これほど後世に名を残すことはなかったでしょう。

「四海の波瀾収まらで、民は苦み天は泣き」という時代に生まれあわせ、「心のどけき春の夢」を実現しようとする劉備、そして、その赤誠せきせいの熱意が諸葛亮を動かします。『三国志演義』の一大名場面がつづきます。